

(今回のお題)

靴職人に学ぶ、若手技術者育成



ベストのものだけをつくってれば、品物を見せただけで伝わるんですよ。思い入れを持っている子には。

藤井幸弘氏

靴職人

オーダーメイド靴の分野で今やカリスマ的存在のFugee (藤井靴店) の代表。前職は自動車メーカーの設計エンジニア。30歳のとき雑誌で「カバンの男」という特集を見て、革という素材と靴づくりにすっかり魅了され、靴商社への転職を決断。そこで技術を学び35歳で靴職人として独立。現在創業25年目、渋谷区鶯谷町に店舗兼アトリエを構える。1949年生まれ。http://www.fugee.jp/

◆ 儲けを意識した途端、クオリティの妥協が始まる

今は3個つくるよりは4個つくれという時代。名だたるブランドでも質は相当落ちてます。当たり前ですよ。仕入れや工程を抑えるってことはクオリティに手を抜くことですから。職人なんて儲かる仕事じゃないんです。自分達がつくれるベストのものだけをつくるという気持ちを捨てておもしろいはずがない。僕は、遠回りだけどやったらもっときれいになるな、と思うことは絶対やりたい。たとえば、同じ型でも使う革は1枚1枚違うから、裏打ちや折り返しの厚みはどのくらいがベストか、確信できるまで何度でも試作します。苦労ではなく、それが楽しいんです。子どもの頃、必死になって何度も竹とんぼをつくったのと同じ。職人を支えているのはそういう情熱なんです。それさえ持ち続けられれば一生おもしろいし、クオリティも上がっていく。だからうちの品物は去年より今年のほうがはるかにいい、未だに(笑)。当然ですよ、ものを毎日一生懸命つくってれば。

◆ 親方に習う時代から自分で考えて身につける時代へ

この世界も徒弟制度は殆どなくなりました。これからの職人は何でも自分の頭で考えて身につけるしかない。うちにもよく若い子が作品を見せに来ますが、「藤井さんの靴が作りしたい」なんて言う子はダメ。ヘタでも何か「オレはこうしたい」という思い入れが作品に入っていないと。それが一番大事なんです。そういう品物に人は感動するんですよ。この間うちから独立した若いのも、右向けと言っても左向きたがるような子で、目を離すとこっそり実験していました(笑)。そういう子は扱いづらい? それは、何故右向いたほうがいいのかこっちが説明できないからじゃないですか? ものをつくる人間は品物で勝負ですからね。必死でつくっている子なら、僕のがつくったものを見ればちゃんとわかる。品物には、つくった人間が考えたことが、失敗も含め全部入っているんです。